「東インド（１）」（２０２３年１０月０９日）

イタリア人クリストファー・コロンブスがスパイスの産地 Indies を探査するためにスペイン船隊を率いて大西洋を西に向かい、１４９２年にカリブ海の島々に到達してそこをインディズだと思い込んだ。

しかしそれらの島々が帰属している大陸はインディズでないことが明らかになったため、１５０７年にその地域の地名がアメリカとされた。アメリカがインディズと思われてそう呼ばれていた時期はたかだか十数年だったわけだが、カリブ海の島々はその後も相変わらずインディズと呼ばれたようだ。ただしホンモノのインディズと区別するために、そこは西インディズ West Indies とされた。ホンモノの方も名前を変えられて東インディズとなった。

どうした経緯からかよく分からないが、日本語では東インディズを東インドと翻訳した。もちろんインディズはインディアの派生形だからインドに対応させても間違いはないのだろうが、語義内容が違っており、しかも歴史的な意味の変遷を伴っているのだから、現代世界の国名のひとつとは異なる単語にしておく方が、後進に誤解や戸惑いを与えないための大きな親切になったのではないかとわたしは思う。

おまけにインディズという言葉は最初、地理的に広大な領域を指す名称だったのであり、そこには大陸や島や海が含まれていて決して島に限定される言葉ではなかった。それが長い歴史の中で領域の範囲がどんどん狭められていき、現代用法で西インディズはカリブ海の島々、東インディズはインドネシアの島々に限定される結末を迎えた。

その点に着目するなら、West Indies に西インド諸島、East Indies に東インド諸島という日本語が当てられているのは地理学における卓見と言えるわけだが、歴史学から見るならそれらの名称には歴史の奥行きがまるで感じられないものになっていて、東インド諸島とはインド亜大陸の東にある島々を指しているという、語源学的に不正確な解説がまかり通る状態に突き進んでしまったように思われる。

西インド諸島の解説に同じロジックがはたして使えるだろうか。東インド諸島のそんな解説を流布させた人は、西インド諸島に当てはまらないのだからこれは正鵠を射ていない、と思わなかったのだろうか？イン

ディズにインドという日本語を当てはめたためにその現象が派生したのではないかという気がわたしにはするのである。

現存しているこの世界の姿形を作り出した歴史の流れを正確に把握しようとする姿勢は既に無益なものになりつつあるのだろうか？東インド諸島という言葉の内容を理解するために地理的要素の知識だけあれば解説が終わるのなら、インドからあれほど離れているインドネシア共和国がオランダ時代にどうして東インドと呼ばれたのか、しかもなぜ東インド諸島でなかったのかという疑問を解く鍵を見つけることはできないだろう。そんな知識で良しとされる日本の学生たちは、インドネシアの歴史を東インディズという言葉で学ぶ国の学生たちから深みの点で引き離されてしまう懸念をわたしは抱いている。

Indies という語は、中英語で地名としてのインドを指す Indie あるいは Indy の複数形だ。語源はラテン語のインドを意味する India で、それがフランス古語を経由してイギリスに入ったそうだ。

英語発音は単数形インディ、複数形インディズだが、オランダ語はその単数形 Indie の語尾の/e/にウムラウトが付けられていて、インディエと発音される。その発音はラテン語の Indiae にこだわったような印象が濃く、オランダ人のラテン語好きをその現象が垣間見せているような気がする。[続く]

「東インド（2）」（2023年10月10日）

日本語のインドという言葉は中国から印度という文字でもたらされた情報を摂取したものだ。中国語の印度は Indu と発音され、語源はペルシャ人から見てインドゥス河の東にある土地が Indu あるいは Hindu と呼ばれたことに由来していると解説されている。だから昔の中国人はたいへん正確にそれを音写したと言えるだろう。

同じ語源なのに、西方にその言葉が伝えられたとき、それは India という言葉になった。ひょっとしたら、イ

ンドゥ→インディ→インディアという変遷が起こったのかもしれない。それはともかくとして、現代のインド人自身は自分の国の国名にインドゥス河に関連する名称を使っていない。

日本語にはインドとヒンドゥという単語がある。語源的にそれらは同一のものだったにもかかわらず、日本語でその二語を聞き比べると別物の印象を強く感じるのはわたしだけだろうか？もしもインドとヒンド、あるいはインドゥとヒンドゥという組み合わせになっていれば、別物という印象ははるかに薄まったのではないだろうか。

現代世界で Hindu は宗教名として使われるのが主流になっていて、その宗教や信徒を指すケースが多いのだが、昔は宗教と切り離されて地名としての Indu の同義語および人種としてのインド人を意味する使い方もなされていた。Hindu と Indu が同義語なのだから当然のことかもしれない。

ひょっとしたら中国人はその二語が単なる同一語の音変化バリエーションであることを知り抜いていたのだろうか？宗教としてのヒンドゥ（教）が中国語で印度教と書かれることを知って、わたしは目からウロコが落ちる思いをしたことがある。インドで興った宗教はヒンドゥ教だけでないのだから、そこに使われた印度は地理名称でないと考えるべきではあるまいか。話が横道にそれた。

日本語の東インドに該当する諸国語はこうなっている。

英語　East Indies

オランダ語　Oost-Indie　（/e/の上にウムラウト）

ポルトガル語　Indias Orientais　（/I/の上にアキュート）

スペイン語　Indias Orientales

インドネシア語　Hindia Timur

ところが１９世紀にオランダ王国の領土にされた現在のインドネシアのエリアをオランダ人は Nederlands-Indie(/e/の上にウムラウト)という公式名称にしたから、インドネシア人もそれを Hindia Belanda と直訳した。

つまりこの局面では東西に分裂する前のインディズの語が使われていて、「東」の語が消えているのである。しかしイギリス人はその語義の揺れをきっぱりと拒否した。英語では Dutch East Indies と表現されて、イギリス流の頑なな面構えを見せてくれている。

東インディズ地方を描いた古地図には Indiae Orientalis というタイトルが書かれている。調べるとそれはラテン語であると表示されるものの、ラテン語辞典で East Indies の対応語を探すと異なる派生形のものが出現するのである。だからわたしにはあまり確信がないのだが、その点は忘れてそのつもりで扱うことをお断りしておきたい。

東インディズを示す言葉は上のようにいろいろあってややこしいから、本論では英語のインディズ・東インディズで通しておきたいと思う。東インディズ探査の最盛期に英語は主流でなかったから時代錯誤の印象は避けられないと思うが、本論ではその単語で代表させる形を執ることにします。[続く]

「東インド（3）」（2023年10月11日）

ヨーロッパ人がこの地球の探査を行うようになる前の時代、世界の地理は全然はっきり分かっていなかったから、漠然とした大雑把な感覚で遠い異郷の土地と、そこに住む見たこともない直立歩行するサルどもがうごめいている場所について、地名だけがひとり歩きすることになったはずだ。内容は各人のイメージにお任せといったところだろうか。

遠い東の果てに中国があり、東方オリエンタル地域の西部でヨーロッパにつながっている領域がアラブである。アラブのもっと東のほうにインディズがあり、そこで穫れるスパイスがヨーロッパ人の生活に不可欠なものになっていた。金銀の価値に比類されるほどのスパイスはインディズに生えているという知識が、スパイスとほとんど同義語としてのインディズの名をかれらの脳裏に刻み込んだにちがいあるまい。インディズという言葉はそういう、中国とアラブの間に漠然と存在している土地の名称として使われていたように思われ

る。

ヨーロッパ人が自分の力でスパイスの産地を訪れて高価なスパイスを手に入れるための行動を起こす機が熟したとき、ヨーロッパ諸国はわれもわれもとインディズに憧れた。そのとき、インディズという言葉は高価なスパイスと同じ意味を与えられたように思われる。

インディズに向かうヨーロッパ人は最初からスパイスの産地を第一目標に置いたのであって、世界探査はその副次効果だったと言うと言い過ぎになるだろうか？コロンブスだって、スパイスを取りに行くという話だったからスペイン王が船と乗組員を用意したのではなかったか。

１５１１年にマラヤ半島のマラカを陥落させて奪い取ったあと、ポルトガル人は１５１２年についにスパイスの産地であるマルク地方に到達した。ポルトガル人がモルッカスと呼んだインドネシアのマルク地方もインディズの中の一地方なのである。

ところがアメリカと名付けられた新大陸の存在が標準社会常識になっていくにつれて、ヨーロッパ人たちは本来のインディズを東インディズ East Indies という名前に変えた。１５５０年代ごろには、前世紀に使われていたインディズという言葉が世の中で、同じ意味のまま東インディズに切り替わったのではないかと思われる。その変化は、カリブ海の島々を西インディズ、ホンモノを東インディズとして明確に区別するためだったという話になっている。

カリブ海のほうを西インディズと呼ばなければこんなややこしいことをしなくても済んだのではないかと素人頭は考えるのだが、いったいどうしてそんなことになってしまったのだろうか？その原因についての解説をわたしはいまだに探し出せないでいる。

ひとつ推測されるのは、インディズに憧れたヨーロッパの諸国にとって、コロンブスのインディズとアフォンス・ドゥ・アルブケルケのインディズはまるで無関係の、たいへんに大きく距離の離れた位置にある土地だっ

たのだが、そうではあっても資源の宝庫に違いはなかったのだ。つまりインディズという名前の場所がふたつ出現し、しかも諸国家はその両方を「あれも欲しいし、これも欲しい」と垂涎したにちがいない。

かれらがその二カ所への進出を国家方針にする願望を持ったのであれば、そのときに国家戦略立案者たちがそれを東と西のインディズと呼ぶことにした可能性が考えられないだろうか？そのとき、元々は地理名称だったインディズという言葉が「夢のような宝蔵郷（というかまあ黄金郷の一種だ）」というシンボリックな単語に概念転換してしまった。だって最初から、漠然とした地理名称のインディズという言葉は同時に高価なスパイスをシンボライズする言葉になっていたではないか。

こうして地理名称のインディズは East Indies／West Indies というペアをなすシンボリック単語に変身した。ラテン語では Indiae Orientalis と Indiae Occidentalis というカップリングになるはずだ。

もしもインディズが地理名称の機能から投げ出されて宝蔵郷を意味するシンボリック単語に変質したとするなら、オランダ王国が自国領にした今のインドネシアをネーデルランズインディエ Nederlands-Indie と命名した気分が何となく推察できるような気がする。

［ 続く ］

「東インド（４）」（２０２３年１０月１２日）

わたしが抱いた夢想噺はともかくとして、ヨーロッパ人にとって元来のインディズだった地域名称は東インディズに変わったのである。東インディズという地理名称は三つの異なる地理的領域を指して使われたという説明がインターネットから得られた。多分、時系列に沿って変化したようにわたしには推測される。古い順に並べるとこうなるのではあるまいか。

【１】インド亜大陸・インドシナ亜大陸に狭義のマレー諸島を加えたもの

これが元々のインディズの内容だったように思われる。

【2】下の3とフィリピンを包括するマレー諸島

マレー諸島の語義にバリエーションがあり、広義はインドシナ亜大陸からオーストラリアまでを含んだ地域、狭義は3とフィリピンという東南アジア島嶼部だけ。

【3】現在のインドネシア共和国領土

オランダに領有されていた時代にオランダ王国がその地域の公式名称をネーデルランズインディエにしていた結果と考えられる。

上の内容をもう少し?み砕くと、元々のインディズだった【1】が16世紀に入って東インディズと名前が変わったものの、内容はインディズをそのまま引き継いでいた。それがもっと後の時代になってインドやインドシナが個別の名称で認識し表現されるように変化した結果、おのずとそれらが東インディズから脱落して【2】の段階に至った。だが2の段階はあまり長続きせず、漠然とした広域名称の東インディズはオランダ人が実用面で昔のインディズの形で使うだけになって【3】の段階へと進んだ。そして今は、東インディズ（つまりインディズという言葉そのもの）は歴史の中に出て来る術語と化したということではないかと推測されるのである。

インディズ（16世紀に入ってからは東インディズ）という言葉が上記【1】の内容を意味していたことは、古い時代に作られた地図を見れば分かりやすいと思われる。その一例として、1522年にロロン・フリース

（Laurent Fries はイギリス人でない）が製作した Indiae Orientalis と題する地図を見てみよう。

これは、25x30センチの紙面の左側にインド亜大陸とセイロンが描かれ、その右側中央部に Oceanus Orientalis Indicus の海があり、インド亜大陸からほど近い距離にいくつ

かの島々が描かれていて、その島々の中に大ジャワ Java Maior や小ジャワ Java Minor を見出すことができる。

Peutam と書かれている島もあるが、これは他の地図に出て来る Pentan を意図していたのだろうか？ペンタンという島は今の Bintan 島なのだそうだ。このように地図によって、また時代によって、昔のヨーロッパ人が認識した地名と現代の標準名称に違いがあるケースも少なくない。地図によって北マルクのハルマヘラ島が Giololo、ボルネオ島が Porne、ティモール島が Timos と書かれていたりする。

ロロン・フリースのこの地図が、インドネシアの国土を中心に置いて描いた世界最初の地図だと言われている。インディエオリエンタリス地図はその後も更に１５４０年、１５６１年と次々に更新されていった。

１４９２年にマルティン・ベハイムが世界で初めて作った地球儀にも大ジャワや小ジャワという言葉で示されたおかしな形のジャワ島がふたつも描かれている。インディズの一部であるこの地方とヨーロッパの間にはもちろん、アメリカ大陸はまだ描かれていない。

球体の上に描かれたその世界地図はフランチェスコ・ロッセリーニが１４９２年ごろ作った世界地図とよく似ており、インドネシア共和国の土地をはじめて世界地図に掲載したのがそれらの地図だったとされている。
[続く]

「東インド（５）」（２０２３年１０月１３日）

ジャワ島がふたつあったのはマルコ・ポーロのせいだ。かれの旅行記にはおかしな話が書きこまれていて、現物を現地で見聞きして来た旅行者の報告の真偽を計る測定儀などヨーロッパ社会にあるはずもないから、地図製作者は忠実にそれを地図上に反映させた。

マルコ・ポーロは旅行記に、大ジャワと小ジャワがあってジャワは世界最大の島であり、それがもっと南に

ある島につながっていると書いた。1542年に作られた、北が下になっているアジア＝オーストラリア地図では、その情報に従って地図の上部にジャワがたいへん大きなサイズで描かれている。

1594年にヘラルドゥス・メルカトルが制作した地図を元にしてヨドカス・ホンディウスが1606年に作った Insulae Indiae Orientalis Praecipuae Inquibus Molaccae と題する地図は現インドネシア共和国の国土を紙面の中心に位置付けている。

東南アジアのコーチシナ～フィリピンの線を上限にし、ジャワ～ニューギニアを下限にして切り取った、東南アジア海洋部に焦点を当てた構図になっているのだ。ホンディウスはVOCから得た詳細な情報をこの地図に盛り込んだ。

東インディズという地域の中でヨーロッパ人が最大の焦点を当てていたのが何だったかをこの地図が赤裸々に物語っているようにわたしには思われる。ヨーロッパ人の心理の中にあったインディズの本質がこの地図を作らせたと言えないだろうか。

ヨーロッパ人の地図製作は最初からヌサンタラの地をターゲットにしていたとインドネシア人地図専門家は述べている。それは言うまでもなく、スパイスをつかみ取りしたいヨーロッパ人の欲望が底辺に置かれていて、地図がそれを実行動に移すための手引きの役割を持っていたからだ。

東インディズの地理がだんだんと明らかになってきたとき、ヨーロッパ人のアテンションはモルッカスに向けられた。ナツメグの産地であるバンダ諸島の7つの島々、クローブを産するテルナーテやティモール島などが重要さにおいてナンバーワンの目的地にされたのである。

インドネシアの国土が幅広くカバーされた最初の地図はオランダ人カルトグラファーのヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテンが作ったものだった。リンスホーテンはポルトガルがインドに作ったコロニーであるゴアの修道院で働いていた時期にポルトガル人が使っている地図を盗んで、市販されている地図よりずっと正確な地理情報を手に入れた。かれが1596年に出版した著作「東方案内記」に納められたアジア地図には極東までが網羅されている。オランダ人の香料諸島探査、そしてVOCの東インド征服にリンスホーテンの地図はたいへん大きい功績をもたらしたと言えるだろう。

地図は太古の昔から描かれていた。西暦紀元前に地図を作るのが得意だったのはギリシャ人・中国人・エジプト人・バビロニア人だった。だが地球規模で世界を描く地図はヨーロッパ人が完成させたものだ。それはヨーロッパ人の世界探検と歩を合わせて進行する自転車のようなものになった。前輪の探検者が一歩進むと、後輪の地図製作者がその情報を地図に描き加えて一歩進む。ヨーロッパ人が世界中を訪れて未知の土地を新発見し、その情報をヨーロッパ社会に知らせることで地図製作者が世界地図の内容を充実させる

という協働関係が自然発生的に進展した。

　遠い異郷の地を個人や少人数で探検や通商に訪れたり、訪れた先で聞き知った未踏の地の情報について、ヨーロッパ人がヨーロッパ社会に報告した体験記に従って地図製作者が世界地図にそれを描き加えた。だから最初は正確さに欠けた、想像を絵に描いたような、お話にならないものになった。それでもその時代時代で、世界地図というものは最新のグローバル地理情報を集大成した手引書として重宝され、また一覧性の高い図鑑の役割をも果たしていたのだ。

　15世紀ごろにヨーロッパ人が作った世界地図は西暦紀元150年に書かれたクラウディオス・プトレマイオスの著「ゲオグラフィア」に記された内容が基本構造をなし、その上に13世紀生まれのマルコ・ポーロの報告にある地理情報が上乗せされたものだった。それをベースにしながら、わたしが先にたとえた自転車の前輪が少しずつ後輪をより広大で正確なものに導いて行ったのである。多分ポルトガル人のバルトロメウ・ジアスが喜望峰にたどりつき、そこで拾い集めた東方の地理情報が世界地図作製の大きい一歩になったのではないだろうか。

　昔の西洋人が作った世界地図の歩みは、地球、つまり世界というものを西洋人が知る過程を示すものになった。西洋人の「世界」はどんどん拡大して行き、そして「地球」は狭くなっていったのである。[続く]

「東インド（終）」（2023年10月16日）

　大航海時代が始まり、植民地時代へと進んで行く中で、地図はその精度を高めて行った。位置や形がより正確になり、また重要な港や都市が地図の中に記入された。東インディズ地図にはジャワの他にもスマトラ・ボルネオ・モルッカス・ティモールなどの島々が名前入りで登場し、更にバタヴィア・バンタム・テルナーテなどの港がVOCの地図に必ず書き込まれた。

その初期のころ、ヨーロッパ船の船乗りにとって地図は金銀に勝るとも劣らない価値を持った品物だった。中でもポルトガル人とスペイン人にとっては、まだ誰も到達したことのない未知の新天地に導いてくれる貴重な案内役が地図だったのである。地図はかれらにとっての誇りの具現物だった。誇りを失うことは死と同等のものになった。

ヨーロッパで最初に印刷された世界地図はT-Oマップと呼ばれるものだ。１４７２年に作られたこの地図は直径６．５センチの白黒版で、紙面がT字型に三分割されて上が広大なアジア、下の左側がヨーロッパ、下の右はアフリカになっている。そして三つのエリアはO形の海に囲まれているのだ。

昔の地図が一種の図鑑であったことは、ヨーロッパ人が作った地図を見ればよく分かる。海には帆船が浮かび、ヨーロッパから遠い海にはさまざまな怪物が姿を見せている。人魚・三叉鉾を持つ海神・人頭体馬・全身毛むくじゃらの怪人・船くらい大きいノコギリ魚などが遠いこの辺の海や島にいるんだぞ、という図鑑を大人も子供もいっしょになって見ていたのではあるまいか。

コロニアル時代に入ってからは征服された土地の風景や原住民の姿が地図の中に描かれるようになった。図鑑ならではの扱いと言えるだろう。

インドネシアが中心になっている東南アジア海洋部を描いた最古の地図は上述の、１５２２年にロロン・フリースが製作した木版白黒刷りの Indiae Orientalis と題する地図だ。インドネシアの島々はごく少数で東インド海に浮かんでいる。

昔の地図は元来が図鑑の要素を持っていて、図の中に風物や人間の挿絵が描かれるのが普通だった。この地図にもわずかばかりながら山や河の絵が見られる。そしてインドネシアの島々が置かれている領域の右下端の辺りに人間の姿が挿入されているのである。

三人の人間が描かれているその挿絵をとくと観察すると、ひとりは包丁を手にして振り上げており、その前の机には別の人間が横たわっている。どうやらロロン・フリースは東インドの島々にカニバリズムがあるこ

とを風物として図鑑に盛り込んだようだ。だがわたしの目には挿絵の人物たちがどうもヨーロッパ風の服装をしているように見えてしかたがない。

その地図を所有している古地図収集家のひとりは、１５１０年に出版されたイタリア人旅行家ルドヴィコ　ディ　ヴァルテマ著の「ボローニャ人ルドウィコ　ディ　ヴァルテマの旅行記」に書かれた、ジャワ人の大半はカニバリズムを行っているという情報に影響されたのではないかと語っている。

イタリアのボローニャに生まれたルドヴィコは１５０２年に故国を発してアレクサンドリアから中東一帯を旅し、１５０３年に非ムスリムヨーロッパ人で世界最初にメッカ巡礼を行った人間になった。かれはダマスカスからハジ巡礼団体に付添いのひとりとして加わり、その巡礼団体に付いて回ったのである。

更にかれはイエーメン～ペルシャ～インドを越えてセイロン～ベンガル～ビルマを抜け、マラカ～スマトラ、そしてマルクに達した。かれはバンダ島にも足跡を印して、ヨーロッパで黄金に比されているナツメグの原産地を訪れた最初のヨーロッパ人になった。

そこから帰郷するためにボルネオに渡り、さらにジャワ島に足を踏み入れた。どこかで誰かから聞いた話だったにせよ、実際にその地を訪れた者がそこの人間はこんな様子だという話をすれば、たいていの人間は信じるだろう。その様子は今のインターネット時代に世界中で行われていることとたいして違っていないのではないだろうか。時と共に人間は変化するものだが、変化を重ねた長い時間の経過後に昔の自分を振り返って見ると、「なんだ。たいして変わってないじゃないか・・・」。[完]